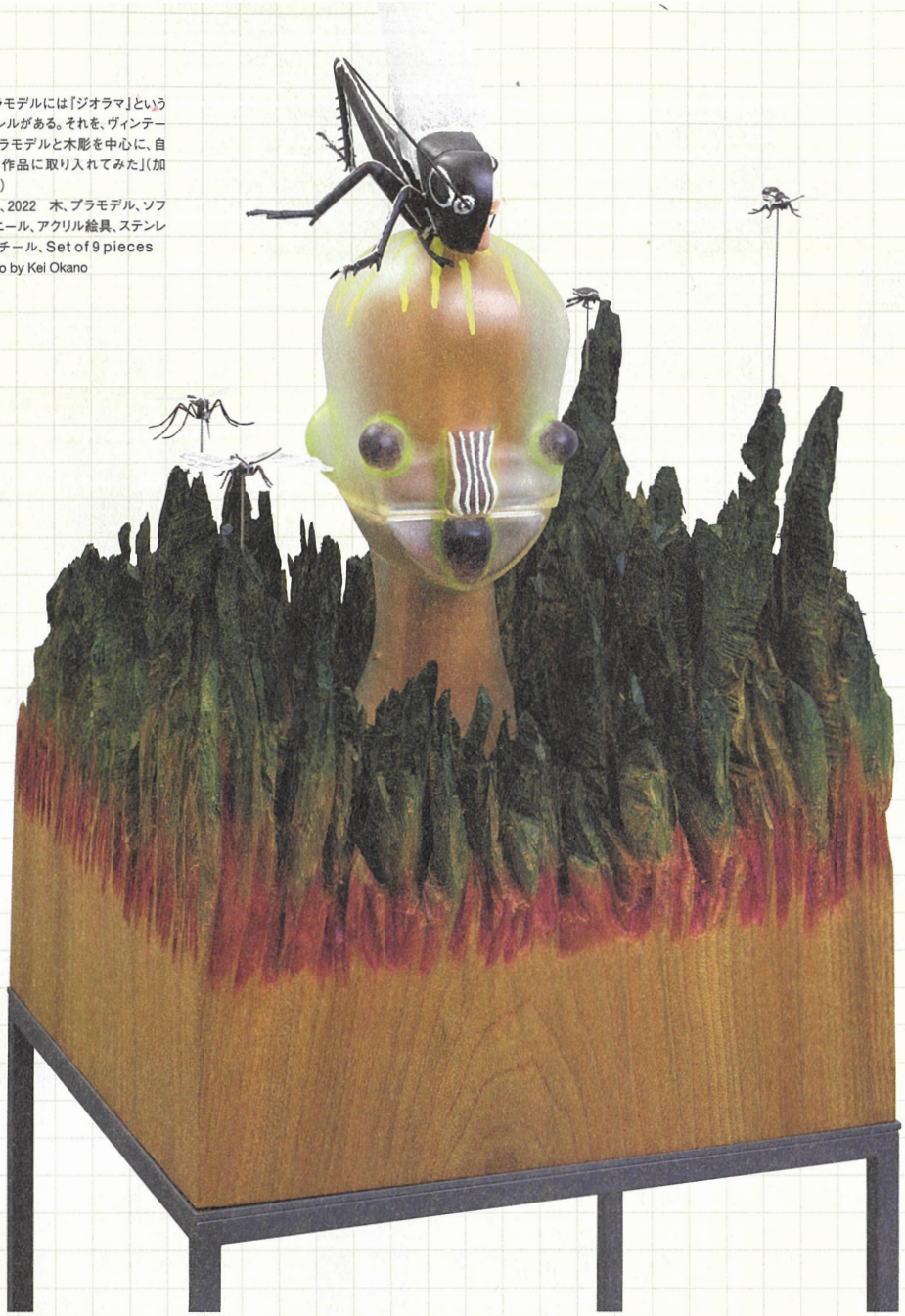
Izumi KATO

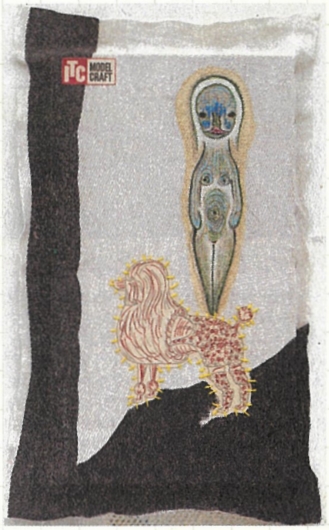
Soen,

新たな素材、プラモデルをテーマに展開「加藤泉ー寄生するプラモデル」

%041 %2023



「プラモデルには『ジオラマ』というジャンルがある。それを、ヴィンテージプラモデルと木彫を中心に、自分の作品に取り入れてみた」(加藤泉)
無題、2022　木、プラモデル、ソフトビニール、アクリル絵具、ステンレススチール、Set of 9 pieces
photo by Kei Okano



「プラモデルの組立説明書に描かれている絵は、誰が描いたかわからないが、とても魅力的である。これらは、プラモデルをコラージュした木彫作品と同様、組立説明書をコラージュし平面作品にしたシリーズ」(加藤泉)
ITC, 2021　布作品：布、プラモデル組立説明書、刺繍、コラージュ、ペン、パステル、アクリル絵具、Set of 2 works　photo by Kei Okano

アートの深ぼり

中島良平=文
text : Rohei Nakajima

新たな素材、プラモデルをテーマに展開

「加藤泉―寄生するプラモデル」

木彫やソフトビニールなどとヴィンテージプラモデルをコラージュした小作品。
無題、2020　ソフトビニール、プラモデル、木、ステンレススチール　photo by Kei Okano

無題、2022　カンヴァス、油彩、額
photo by Kei Okano

平面から立体へ ペインティングと造形を行き来する自由な発想力

パンデミックの影響で久々にスタジオでゆっくり過ごすことになったという加藤泉。ネットで昔の動物や昆虫のプラモデルを買い漁っていたが、やはりアーティストだ。早速、木彫作品にひっつけてみた。悪くない。すると、プラモデルの箱の絵や説明書の図面だってカッコいい。絵描きとしてコラージュしたくなってきた。「子供が多い世代なので、プラモデルはメジャーなホビーだった」と加藤は原体験について話し始める。

「最初は車や戦車を作っていましたが、あるとき『ホビージャパン』という雑誌で、イラストレーターの横山宏さんがミクロマンというキャラクターのプラモデルを改造したり、『S.F.3.D.』というものを発表したんです。ヘリコプターや戦車など別のプラモデルのパーツをくっつけて改造したそれが、スポンサーがついてリアルタイムでプラモデルになっていった。衝撃的だったので、僕も実際にプラモ屋で予約して買いましたが、それが原体験になっているのかもしれません。自分が好きで改造して作ったものが、実際にメーカーがプラモデルにしてくれるんだと」

現在、ワタリウム美術館でプラモデルをテーマにした加藤泉の個展が開催されている。ペインターとして人のような妖精のような不思議な生物を描き、それを木やソフトビニール、石などで彫刻作品にも展開してきたアーティスト

深ぼり

加藤泉をもっと知りたい！展覧会を巡る二人のインタビュー

リボーンアート・フェスティバルのために作られた石の作品。美術館の外も見逃さないようにチェック!
photo by Yusuke Sato Courtesy of the artist ©2022 Izumi Kato

アーティスト加藤泉の現在地

和多利浩一（ワタリウム美術館 代表）

人型のイメージを描き続けるペインターとして登場し、それを顔だけのアップや全身などへと変化させるなかでいろいろなアイデアが生まれ、木彫やソフトビニール、石などの立体表現へと展開したのだと思います。宮城県石巻市で開催されたリボーンアート・フェスティバル 2021-22〔後期〕（'22年8月20日～10月2日）への参加をお願いして、石巻で採れる稲井石を組み合わせて直接ペイントする「ヒトのような像」を発表していただいたのですが、打ち合わせでアトリエを訪れると、コロナ禍でできた時間を使ってプラモデルを楽しく作っていた空気が伝わってきました。そこから今回の展覧会『寄生するプラモデル』の実現に至りましたが、会場では加藤さんの制作姿勢の自由さを感じていただきたいと思います。制作を積み重ねてきて熟練された作品に満足することなく、常に新しい素材や方法を見つけて融合させる自由さが、今後も新たな作品を生み出すだろうと確信させてくれます。

プラモデルがアート表現の一部になった喜び

神藤政勝（ゴモラキック 代表取締役）

ホビー業界でも有名な加藤さんの作品《無題 2004（注：壁に手をつくヒトのような木彫作品）以後、現在進行形の作品まで、ロジックで見るとそれぞれの作品が異なる表現であることに気づきます。しかしながら、すべて歴とした加藤泉作品に仕上がるという内なるパトス（注：アリストテレス倫理学で欲情、怒り、喜び、哀しみなどの快楽や苦痛を伴う感情状態を指す言葉）に計り知れない魅力があります。「金型や成型などのプロダクトの部分も表現の一部」という加藤さんの想いを受け、今回プラモデル制作に携わりました。加藤さんが選出した石を安易な3Dスキャンではなく、医療用CTスキャンを使用してより正確な形状をデータ化する馬鹿げた手間をかけたり、金型製作の際にパーツの枠部分の断面形状を工場が作業しやすい四角くではなく、昔ながらの丸を押し通そうと喧嘩状態でやり取りしたり、そういった一連の私の作業すら加藤さんのアート表現の一部であったように思えています。

オリジナル・プラスチックモデル。
photo by Kei Okano

ワタリウム美術館3階の展示風景。 photo by Yusuke Sato Courtesy of the artist ©2022 Izumi Kato

が、新たな素材として作品にプラモデルを取り入れた。木彫の生き物の背中にスケルトンの犬が載っていたり、ソフトビニールの頭の上に昆虫のプラモデルが載っていたり。さらには、先述の少年時代の原体験を当事者として再現してしまうかのように、自身の彫刻作品をプラモデルにしてしまった。パートナーとなったのが、フィギュアなどの原型を手がけるブランド、ゴモラキックの神藤政勝だ。

「実物の石に僕がドローイングを描き、これをプラモデルにしたいと伝えて、石の彫刻をプラモデルにしました。技術的なところはわからないので神藤さんに丸投げでしたが、絵の部分をシールにしていただいて、石の彫刻をCTスキャンにかけたりしてくださったみたいで、お金をかけて丁寧に作っていただきました。いろいろと苦労もあったのではないかと感謝していますね」

絵画制作に始まり、そこに行き詰まったときに試した木彫作品をきっかけに立体へと制作の幅を広げた加藤。パーツを組み合わせることに面白さを感じたことで、2枚のキャンバスを組み合わせて絵画を制作するようになるなど、制作が次の発想へとつながり新たな作風を生み出してきた。最近では、木彫作品を原型として鋳造したブロンズ製の巨大なオブジェに自ら着色したパブリックアート作品がフランスで発表されたように、ペインティングと造形を自由に行き来して制作を続けている。プラモデルという素材を手に入れた加藤から、さらなる次の表現を期待させる展示がワタリウム美術館の3フロアに展開する。

「展覧会で作品を発表するのは作家にとってひと区切りになるからすごくいいんですよ。そうすると、次に展開しやすい。今は展覧会が始まったところで完全なお休みモードですからノーアイデアですが、多分またすぐ何か出てくると思いますよ」

『加藤泉―寄生するプラモデル』

3月12日（日）まで。
「ワタリウム美術館」
東京都渋谷区神宮前3-7-6
11時～19時　月曜休
観覧料：一般¥1,200、学生（25歳以下）、高校生¥1,000
http://watarium.co.jp

photo by Claire Dorn

Izumi Kato●1969 年生まれ、島根県出身。'90年代末より画家として本格的にキャリアをスタート。子どもが描くようなシンプルで記号的な顔のかたちに始まり、現在まで人型（ひとがた）を手がかりに展開している。2000年代から木彫作品を発表し、現在は、ソフトビニール、石、布、プラモデルなど幅広い素材を使い制作している。